# 和歌山県における櫨の民俗

## ―紀美野町の栽培・採取を中心に―

藤井弘章

### 一　和歌山県の櫨生産・製蝋に関する先行研究

櫨はウルシ科の植物であり、和歌山県に自生していたが、近世まで産業として注目されることはなかったようである。江戸中期、有田郡箕島村（現在の有田市）の田中善吉が紀州藩の命を受け、薩摩（現在の鹿児島県）から甘蔗（サトウキビ）苗とともに櫨の苗を持ち帰った。藩の殖産政策により、海士・名草・那賀郡の各地に櫨の苗が配布され、櫨の栽培が拡大し、櫨の実から蝋燭などの原料を製造する製蝋業が発展した。こうした紀州における製蝋業の歴史的な展開については、紀州近世史研究者の笠原正夫が注目し〔笠原　一九七三〕、『有田市誌』、『下津町史』、『野上町誌』などに取り上げられた〔有田市誌編集委員会　一九七四、下津町史編集委員会　一九七六、野上町誌編さん委員会　一九八五、貴志川町史編集委員会　一九八六、清水町誌編さん委員会　一九九八、砂川　二〇一六〕。また、海南市の製蝋業者についても報告がある〔海南市立歴史民俗資料館　一九九一〕。

しかしながら、櫨の生産地の民俗、つまり栽培、採取に関する研究はほとんどおこなわれていないのが実情である。先行研究のなかで、櫨の生産という項目を立てて紹介しているのは『野上町誌』である。ここでは第4章「工業」第3節「櫨と製蝋」として取り上げられており、「櫨の栽培」、「ブドウ櫨の発見」、「ブドウ櫨の原木」、「野上における櫨の生産」、「野上の製蝋業」という項目を立てている。それでも、櫨生産の具体的な作業工程などはまったく記されていない。(1)

筆者は櫨栽培の中心地のひとつであった和歌山県紀美野町において、町内各地の生業などを平成二三年（二〇一一）から二六年（二〇一四）にかけて調査した。(2) このなかで、おもに平成二五年（二〇一三）に紀美野町内の複数の地域で櫨のことを聞いた。また、近畿大学文芸学部の民俗学実習を、平成二四年（二〇一二）から現在に至るまで紀美野町で実施している。このなかで、櫨についても聞き取りを継続してきた。そうした調査の中で、志賀野地区において、現在でも櫨採りをしている方がいると聞き、聞き取りをすることができた。(3)

一方、りら創造芸術高等学校（紀美野町真国宮）では地域デザインの授業のなかで、地元の文化を聞き取り、発信する取り組みをおこなっている。近畿大学の民俗学実習と交流するなかで、志賀野地区の櫨農家に注目し、櫨採りをする様子を撮影してきた。そして、文献調査、聞き取り調査、現地踏査をおこない、かつて県指定の天然記念物に指定されていた「葡萄櫨」の原木を見つけ出した。和歌山県海草振興局農林水産振興部林務課・近畿大学生物理工学部・和歌山県立向陽高等学校などの協力を得て、樹齢調査・ＤＮＡ調査を実施し、天然記念物への再登録に向けて活動を展開している〔鞍　二〇一八、神山ほか　二〇一九、三木ほか　二〇一九〕。その活動はメディアにも取り上げられ、地域の活性化につながっているとして、令和元年（二〇一九）五月には、第三二

回特用林産功労者特別賞を受賞している。原木調査の成果の一部は、『民俗文化』三一号（本紀要）にまとめている。

本稿では、これまでの筆者による紀美野町の調査のなかで、櫨に関して聞き取りできたことを列記し、和歌山県の櫨生産地における栽培・採取など具体的な櫨とのかかわりについて提示する。

## 二　紀美野町の概要

紀美野町は和歌山県北部の山間部に位置し、東西に細長い町域となっている。東から貴志川・真国川という二つの河川が流れていて、二つの河川沿いにわずかな平地が存在する。この流域は地元では野上谷と呼ばれてきた。東側は旧伊都郡（かつらぎ町・九度山町・橋本市・高野町）である。歴史的・宗教的につながりの深い高野山が立地していて、山が高い地域である。西側の沿岸部は旧海士郡・名草郡（合併して海草郡）で、現在は和歌山市・海南市の市街地が存在する。北側は旧那賀郡（紀の川市・岩出市）で、紀の川に沿って東西に平野が広がっている。南側は長峰山脈が東西に連なっていて、その山脈の南には有田川が流れている。この地域は旧有田郡（有田市・有田川町）になる。紀美野町は歴史的には紀の川流域と同じ那賀郡に属していたが、昭和二六年（一九五一）に、沿岸部の海草郡に編入されている。和歌山県北部の文化圏としては、旧郡単位で伊都・那賀・海草・有田というまとまりが認められる。紀美野町の町域は、これら四つの郡の中間に位置し、大きく見ると山間部と沿岸部の中間でもある。

櫨栽培が広まった江戸時代、紀美野町の西部は紀伊藩領、中部・東部は高野山領であった。明治二二年（一八八九）の町村制施行時には、東野上村（のち東野上町）・小川村・下神野村・上神野村・猿川村（のち国吉村）・志賀野村・真国村・細野村（のちに旧桃山町と分村）・長谷毛原村が成立した。昭和三〇年（一九五五）四月、東野上町・志賀野村・小川村が合併して野上町が成立し、同年六月に下神野村・上神野村・国吉村・長谷毛原村が合併して美里町が成立した。さらに昭和三二年（一九五七）八月には那賀郡細野村の一部（現在の円明寺・四郷・勝谷）が編入した。平成一八年（二〇〇六）一月一日に、野上町と美里町が合併して紀美野町が誕生した。

現在の紀美野町では、昭和初期まで存在していた行政村が地区の単位として機能している。たとえば、旧志賀野村は志賀野地区、旧真国村は真国地区というまとまりがみられる。以下では、本稿において重要な志賀野地区・下神野地区・上神野地区・真国地区のみ詳細を紹介しておく。

志賀野地区は真国川沿いを中心に、松瀬・釜滝・西野・東野・国木原という五つの集落が点在する。近世には高野山領、近代には野上町であった。このうち、東野・西野は真国川沿いの平地に人家が集中し、地区全体の神社や公民館もこれらの集落に立地している。東野の北東部には標高四七七ｍの雨山がある。国木原は紀の川市貴志川町を見下ろす山の上に立地しており、貴志川町方面とのつながりが深い。真国川と貴志川は、松瀬において合流する。

下神野地区は貴志川沿いに位置する。志賀野地区の南東に隣接した地区である。福田・神野市場・樋下・安井・野中・南畑・箕六・永谷という集落がある。このうち、神野市場は中世から山間部の物資が集まる拠点として栄えたといい、現在まで人家が多く、旧美里町の役場があったところである。下神野地区の福田・神野市場・安井・野中・樋下付近に平地が広がる。

上神野地区は下神野の上流に位置する。大角・三尾川・上ケ井・津川・鎌滝・赤木・高畑・桂瀬という集落がある。下神野・上神野ともに近世には高野山領、近代には美里町であった。下神野地区の箕六、上神野地区の上ケ井は

長峰山脈の標高四〇〇m付近まで家々が点在する。上神野地区の津川は、貴志川と真国川の間に挟まれた東西に細長い谷あいの集落である。

真国地区は、真国川沿いに位置し、志賀野地区の上流に当たる。井堰（いせき）・蓑（みの）垣内（がいと）・真国宮（まくにみや）・蓑津呂（みのつろ）・花野原・初生谷（ういだに）・北野という集落がある。このうち、現在では、井堰・蓑垣内・真国宮・蓑津呂は下真国、花野原・初生谷・北野は上真国と呼ばれている。真国地区は、近世には高野山領、近代には美里町であった。下真国には平地が広がっている。蓑津呂から花野原に入ると、平地がなくなり、山が深くなってくる。かつて細野村に属していた円明寺・四郷・勝谷については、真国地区のさらに上流に当たる。これらの集落は、現在では真国地区に含められており、奥真国などと呼ばれることもある。なお、真国宮には真国丹生神社があり、りら創造芸術高等学校が存在する。

## 三　紀美野町における櫨に関する民俗事例

### 1　志賀野地区の事例

事例1

何代も前から櫨を作っている。徳川時代から作っている。今は三〇〇本ある。おじいさんのころは一〇〇〇本ぐらいあった。家族でよう採らんので、人を雇って採っていた。終戦後は一番よかった。人件費も安かったので、人を雇って採っていた。終戦直後は、兵隊に行っていた人が戻ってきて仕事がなかった。そのときは、工場も焼かれてやっていない。一日日稼ぎの労働は安くても人が集まった。人を雇っても人件費が安かったので、櫨の収入は、普通の労働者の一日の賃金の三倍も五倍ももうかった。櫨は九州に多い。福岡・大分など。四国にも多い。値段が安くなって、柿・みかんに切り替えた。

この上（家の上の方、真国川の南側）にも櫨ばっかりの山がある。南側の櫨は一軒ぐらい。雨山には東野じゅうの人が櫨を持っていた。ほとんど持っていた。雨山櫨は有名だった。

志賀野では櫨を作るだけ（製品にはしない）。終戦後は、（この辺りには）みな櫨の木があった。今は櫨を採るのは自分一人になった。安くなってみな採らんようになった。櫨が減ったのは、物価に比べて安くなったから。以前は、人を雇っても、（人件費は）一割だった。昭和二〇年から一〇年ぐらいはよかった。

全盛期には、櫨を搾って製品にする会社が、海南市内、有田に一〇軒ぐらいあった。有田にも櫨はあった。今は、海南の且来（あっそ）に一軒だけある。吉田製蝋所。自分はそこに売っている。今はそこしかない。県内に一軒しかない。かつては番頭役をする仲買人が土地土地にいた。仲買人が買いに来た。今は直接、吉田から買いに来る。正月前と二月の末と、二回採りに来る。昔は人を三・四人雇って櫨を搾っていた。櫨屋というと分かる。昔はろうそくにしていた。櫨のろうは、羊羹みたいなもん。自分は櫨を作って売るだけなので、あとのことは詳しくない。今は、石油の副産物でろうそくができてしまうので、櫨でろうそくを作ると勘定に合わない。今は、医薬品、化粧品、相撲取りのびんつけ油などを作っている。

櫨の実生は実が小さい。収穫がない。半値でも買ってくれない。種を植えて、三年ぐらいたつと親指ぐらいになる。そこに接ぎ木をする。実生に接ぎ木をして葡萄櫨を作る。ブドウのようなので葡萄櫨という。もっと大きくなっても、接ぎ木はできる。ハラツギという。春か秋に接ぎ木をする。

冬に収穫する。一一月から紅葉する。真っ赤になってきれい。モミジよりも葉が大きいので目立つ。葉が一月に落ちる。実は一二月から採る。葉が落

ちて実だけになったときに採る。もいで採る。冬なので日は短い。採る時間が短い。朝は霜が降りている。日が出るのも遅いので寒い。八時回らんとお日さん（太陽）は出ない。遠いところに行っていると、四時過ぎに木から降りないと帰れない。今は車なので暗くなっても大丈夫。

採るのは二か月ぐらいかかる。一月中ごろから、ヒヨ・ツグミなどの小鳥が食べにくる。真ん中に種がある。種の中の実を食べている。小鳥も食べるもんがない時期。柿・みかんなど秋の果物をつつきに来る。一月になると食べるものがないので、櫨の実を食べにくる。それまでに採らんと、高い木に登っても、実がないようになる。以前は一月に一〇日ほど雪が降った。最近は降れへん（降らない）。雪が降ったら採れない。風が吹く日もあかん。振り落とされる。

木へ登って採る。高い木は一〇メートルもある。てっぺんまで登って採る。サーカス師みたいなことせんなん（サーカス師のようなことをしないといけない）。ロープを持って行って引っ掛けて採る。

櫨の枝を引き寄せる棒は鉤という。とくに何の木ということはない。雑木。二股になっているものはあんまりない。股のところが弱いので針金を入れている。裂けたら仕事にならない。何本か持っている。太い木はロープで引っ張る。木は折れやん（ロープで引っ張っても枝は折れない）。真ん中へ寄せる。

前は人も雇って採ったが、今では自分一人で採っている。自分は学校上がりから六〇何年採っている。長年のかん、こつで採る。一日中、木に登って櫨を採っているので、胸のポケットに小さなラジオを入れて聞いている。採りながら歌も歌う。

櫨はかぶれる。手袋をすると、どんくさい（採りにくい）。採って籠に入れるとき、手袋をしていると実を落とす。

櫨を入れる籠は櫨採り籠という。竹で作っていた。二貫目入る。籠に鉤をつけて、枝へ掛けている。いっぱいになると、ロープで下へ下ろす。竹籠はだいたい自分とこ（自分の家）で作った。竹が自分とこにあるので。手先の器用な人でないとええものはよう作らん。器用な人は野上のほうの店へ卸していた。東野にも一軒ぐらいいた。

籠からドンゴロスへ入れる。ドンゴロスは麻の袋。一〇貫目入る。籠に五杯分入る。吉田から秋に袋を持ってくる。

以前は雨山まで弁当を持って採りに行った。オウコ（天秤棒）でいのて（担いで）持ってきた。前、後ろへぶら下げて運んだ。前と後ろと同じぐらい（の量）にしないといけない。しんどくなると、肩を替えた。右にして、左にして、一服して歩いた。歩いて一時間かかる。午前中に一袋、午後に一袋採った。前、後ろに袋をぶら下げた。

櫨は今でも貫目で売る。去年は三〇〇貫ほど採った。一トンあった。生は重いけど、乾燥して売った。水分を取るために倉庫に置いておく。何年も前のもののほうがいい。雨に濡れたら広げて乾かす。お日さんに当てる。そうでなければ、ドンゴロスで倉庫に置いている。

櫨は四月の末ごろに花が咲く。白いというか黄色の花。蜜が多いので、蜂が飛んできて蜜を吸う。このへんも、戦後は養蜂の人が蜜箱を置きに来た。櫨の蜜もええという。自分の家でも蜂を飼っていた。一箱とか二箱。商売ではない。ニホンバチ。五月にワカレをして、櫨などにたかる。今は洋蜂。（櫨の花は農耕の目印にならないか、という問いに）「八十八夜やから、籾蒔かんなんぞ」、という。春になるとみな花が咲くので櫨はそういう言い方はない。梅はちょっと早いけど。

櫨はカズラに巻かれて枯れてしまう。一年に二回ぐらい下草を刈る。日が当たらんし、窒息死する。柿・みかんは消毒するが、櫨は消毒はいらない。肥料としては、昔は人糞をやった。畑の防風林をかねて櫨を植えていた。野菜、果物に肥料をやるので、櫨もよくできた。葉が落ちて肥料になる。それが自然。自然のものは、一年実をつけると、あくる年は休む。オモテバン（表番）、ウラバン（裏番）という。「今年はウラバンであんまりなってないぞ」、という言い方をする。ウスナリやったら半分も採れない。六〇歳ごろのころ、櫨を採っているところを取材されて、新聞に載った。

野上谷はシュウロ（棕櫚）で生計を立てていた。シュウロのある家は多い。自分の家もシュウロはあった。櫨もシュウロもよかった。シュウロは年中収穫できる。タワシ、蓑にした。このへんで原料を作って、野上（紀美野町西部・海南市東部）、阪井（海南市）で加工して、全国に売った。一日シュウロを採ると、サラリーマンの一月の賃金と同じになった。シンバ（新葉）ができたときにも刈り取った。草履にした。ビニール、ナイロンがでてきて売れなくなった。自然のものは科学が発達すると負けてしまう。

田んぼは五反あった。櫨とシュウロが収入源だった。

紀美野町東野、七良浴正（しちりょうざこ）（昭和五年生まれ、この年は八四歳）、二〇一四年九月一一日聞き取り（鞍雄介氏、竹村悠氏も同行）

事例2

七良浴さん（事例1）のように大きな家の人は勤めずに、米・みかん・柿・野菜・櫨などを作って暮らしていた。七良浴さんの櫨の畑は家の南側の山のてっぺんにある。南側。今年もぬくい（暖かい）日には木に登って櫨を採っている。この前も、家の裏の櫨を採っていたので見ていた。

自分は櫨は採っていない。

この上（家の上の方）の伊南さんはうまかった。ロープを掛けるのがうまい。伊南さんは自分よりも四つほど上だった。もう亡くなっている。普通は一日に一〇貫採るところ、伊南さんは二〇貫も四〇貫も採った。人の三倍も四倍も採った。いのてくんの（担いで帰るのが）難儀するほどだった。伊南さんは大きな手をしていた。きれいに採った。七良浴さんもうまい。ロープをうまく張る。

櫨は継いだら強い。実生だと成長が遅い。上に伸びる。枝を張らない。七良浴さんの家の裏の櫨は継いでいるので枝が張っている。

このあたりはもともと細かい櫨だった。松瀬にある葡萄櫨を継いだ。（いつごろ継ぎましたか、という問いに）昭和一六・七年ぐらいに継いだ。自分は一年生だった。葡萄櫨は松瀬の吉瀬という家にあった。みんな、枝を折ってきて、櫨を継いだ。幹を二つに割って、間へ葡萄櫨の枝を差し込んで、赤土を練ったやつで回した。（赤阪さんも行ったことがあるんですか、という問いに）子どものころ、吉瀬の家では、蚕を飼っていた。授業せんと、学校から桑の木をむきに行かされた。繊維を取って、軍服にした。生の桑だといいが、蚕にやって枯れた木をむいたので、むきにくかった。吉瀬には大きな櫨があった。元じょ（あの木は、このあたりの櫨の元だ）。

葡萄櫨は普通の櫨と違う。葡萄櫨は赤い。自然と生える櫨に継ぐと成長が早い。櫨採りはロープに鉤をつけて、ぎゅーっと寄せてきて採る。自分が採りやすいように櫨の木の形を作る。

櫨は今ごろの時期（冬）に触ってもかぶれへん（かぶれない）。四月ごろは一番危ない。はた（近く）を通っただけでもかぶれる人がいる。芽が出る時期はかぶれる。

紀美野町東野（西野出身）、赤阪智勇（昭和九年生まれ）、二〇一七年一二月二七日聞き取り

事例3

櫨は秋にきれいに紅葉する。小さい実がなる。（櫨の）下へ行くとかぶれる。実をつぶしてろうそくにした。高野山では今も櫨で作ったろうそくを使っている。櫨のろうそくは、風が吹いて消えへん（消えない）。このへんにはろうそくを作る人はいなかった。実を売るだけだった。田の畔、畑の畔、どこにでも植えられた。櫨山（櫨を集中的に植えた山）は作っていなかった。亀川小学校（海南市）のはたにろうそくを作っている人がいた。戦時中にみかんは切られて、戦後にまた植えた。父は食糧事務所に勤めていた。櫨・シュウロ・みかんを植えて、金を取ったほうがいいといっていた。

紀美野町西野、赤阪恵子（昭和一八年生まれ）、二〇一三年八月一日・二〇一七年一月六日聞き取り

事例4

旧暦の正月は昭和二八年の水害の二・三年後までしてた。新正月は暖かいし、みかん採り、櫨採りが終わっていないので嫌った。しばらくは新と旧と二回正月をやっていた（井本）。

山にはシュウロと櫨を植えていた。ワルキ、炭もした。西山さんは四〇町の山があった（西山）。

志賀野は櫨が多かった。志賀野小学校の校歌にも櫨とシュウロがある（赤阪恵子）。

畑のはた（近く）に櫨があった。畔などにあった。畑のはたは肥えてるのでようできる。大事においていた（井本）。

実から生えたのはあかん。実生の山櫨はあかん。継がなあかん（下野尻・井本）。

西山さんは櫨採りをした。

雨山の山は櫨ばっかりだった。海南の旦来に蝋屋がある。今でも買いに来る。今は化粧品にする（井本）。

ダムの奥に櫨ばっかりのところがある。その間にシュウロを植えていた。

専門に採ってくれる人がいた。身の軽い人が採った。だいぶ枝の先まで行かないと実が採れない。ロープをかけて採った。櫨はかぶれる。

晩方、いのて（担いで）持ってくる。下野尻さんは一五貫ぐらいドンゴロスへ入れて持ってきた。前後で一五貫。大きな家は人を雇った。井本さんは四〇キロはいのた（担いだ）。西山さんもいのた。

漆は櫨ほどなかった。海南から買いに来た。

井本さんは鉄砲でヒヨを撃った。村田銃で撃った。雨降りに玉をつめた。櫨の木にヒヨはよう来る。ピーと笛を吹いたら寄ってくる。子どものじゅうは、オシをかけて捕った。木を曲げて捕った。

紀美野町志賀野地区、西山一太（昭和九年生まれ、西野）・下野尻貫一（昭和三年生まれ、西野）・赤阪恵子（西野）・井本兆員（昭和一二年生まれ、松瀬）・井本晴子（昭和一五年生まれ、松瀬、西野出身）、二〇一四年一月四日聞き取り[4]

事例5

櫨はあった。戦後、採った。ええ日当になった（いい収入になった）。木さくい（裂けやすい）ので木からまくれ落ちる（転がり落ちる）。重根（海

南市）にろうそくにするところがあった。そこでろうにした。父は持って行った。商売した。自分の家には今でも大きな櫨の木がある。ブドウとナミがある。ナミは細こい。安かった。海南からも山東（和歌山市）からもよう買いに来た。

（家の前の）櫨は何百年もたっている。伸びていた。枯れこんで枝を切った。今は小鳥の餌。紅葉するときれい。この木がなかったら暑いので切れない（木で覆われなくなって、家の中が暑くなるので切れない）。

紀美野町国木原、大浦龍三（昭和五年生まれ）、二〇一三年八月八日・一四日聞き取り

事例6

櫨は若干あった。櫨採り専門の人がいた。採りにきてもらった。櫨はものすごく大きくなるので、採ってもらった。小さいころは採っていた。

紀美野町松瀬、結城嗣郎（昭和一七年生まれ）、二〇一三年八月一日聞き取り

事例7

柳沢さんの家の櫨は、静代さんがこの家に嫁に来てからは収穫していない。鳥はみかんが好き。みかんがないようになると櫨を食べにくる。

紀美野町松瀬、柳沢静代、二〇一七年一月六日聞き取り

柳沢さんの家の櫨は、子どものころからあまり変わっていない。六〇年前でも同じような感じだった。原木に近いと思う。櫨の最盛期は秋ごろ。正月まで。春は白い花が咲く。秋には真っ赤に紅葉する。

櫨山はない。櫨はシュウロ山にぽつんぽつんとあった。

モーチを木にまきつけてメジロを捕った。オシは櫨やナルテン（南天）を餌において鳥を捕った。柿の採り残しにヒヨなどが来る。

紀美野町松瀬、前村勲（昭和二一年生まれ）、二〇一七年一月六日聞き取り[5]

事例8

櫨は自分の山やみかん畑の傍に植えていて、おじいさんとお父さんが冬にみかん取りをした後に、実をとっていた。和歌山からろう屋さんが来て買っていった。今は畑の櫨はもう切ってしまった。山の櫨はそのままにしている。

紀美野町西野、薮本やす子（昭和一一年生まれ）、竹村悠氏聞き取り

## 2　下神野地区の事例

事例9

シュウロ山に櫨の木がある。実を採って売った。山や田んぼのふちに櫨を植えた人はいる。櫨の実は自分で採る。細い端に実がなっている。上の方からロープで吊り上げて、鉤で引っ掛けて採る。山の端に生えているから採るのは怖い。

父は櫨がいらんようになってから、櫨を炭にしたことがあった。ハゼるので（櫨は火に入れるとはじける）、ズボンに穴が開いた。

紀美野町福田、谷垣内和夫（大正一四年生まれ）、二〇一三年一一月一四日聞き取り

事例10

二月一一日ごろ。ヤマハゼの皮を剥いて、一週間ほど乾かして、野中のお寺に供えた。その棒で「ナレナレ柿の木ならな正月の・・・」などと言いながら柿の木を叩いた。

この辺りは棕櫚、櫨の実の売買がすごかった。ドンゴロスへ金を入れたという。

紀美野町神野市場、伊南陽弘（満福寺住職）、二〇一二年五月一七日聞き取り

事例11

（下神野から）上神野へかけて櫨が多かった。大きな木があった。櫨は自然に山に生えている。鳥が糞をして生えてくる。実生ばっかり。ええ実がならん。自然に生えたのを継いで作った。継いで作った櫨をブドウという。粒が大きい。実生より油が取れる。実生でも油は取れる。一一月に葉が落ちてから実を採った。実を採ると四・五日かい（かゆい）。かぶれた感じがする。一週間もしたら慣れてしまう。ろうそくを作る。搾る設備のあるところへ持って行く。四国あたりで作った。仲買の人が、四国へ出すと言っていた。仲買は市場（神野市場）、福田あたりの人だった。

紀美野町樋下、紺谷忠雄（昭和三年生まれ）、二〇一三年一一月一四日聞き取り

## 3　上神野地区の事例

事例12

櫨は採りにきた。かぶれる。

紀美野町大角、窪田旭（昭和一六年生まれ）、二〇一三年九月二日聞き取り

事例13

隣の家はシュウロと櫨で金を取った。櫨とシュウロを同じ山に植えていた。櫨は大きくなる。シュウロは日陰になるが、両方で金が取れる。隣の人は医学博士になった。シュウロのおかげやといった。その家の仕事を父親はさせてもらった。櫨採りをした。シュウロの皮剥きもした。自分の家は、畑の周りにちっと（少し）あった。日が当たるので品質はよかった。

紀美野町三尾川、梶谷弘（大正一四年生まれ）、二〇一三年八月七日聞き取り

事例14

櫨はだいぶ採っていた。大きな木があった。買いに来た。上ケ井でも採った。夫も採った。山道は砂が流れるので、砂を止めるところがある。砂止めに櫨を植えていた。道の岸が高かった。岸の横に砂をためるところがあった。

紀美野町上ケ井、横山美枝（大正一三年生まれ）、二〇一三年一一月五日聞き取り

事例15

櫨もあった。今でも大きな木がある。実を採った。よう売れた。よその人に採ってもらった。買いに来た。子どものじゅう。嫁いでからはあんまりなかった。

紀美野町上ヶ井、中尾スミ子（大正一二年生まれ）、二〇一三年一二月二六日聞き取り

事例16

櫨はシュウロ山にあった。植えたのか。櫨は折ったらあかん。なった実を採らんとあかん。木へ上って、ロープを渡して枝を寄せてきて実を採った。

紀美野町津川、岡大和（大正一三年生まれ）、二〇一三年一一月五日聞き取り

事例17

櫨は自分で採る人もある。一軒の家にちょこっとずつあった。ようけ（たくさん）ある家はない。植えたんやろう。畑の端に大きな木があった。うちも五・六本あった。そこには何十年も行けへん。木に上がってよう採らんかった（採ることができなかった）。商売で採る人がいた。買うてもうた（買ってもらった）と思う。

紀美野町鎌滝、上岡旭（大正一五年生まれ）、二〇一三年一一月二九日聞き取り

事例18

櫨は大きな木はあったけど商売にしている人はなかった。漆は自然に生えていた。

採る人がいた。下神野の人だった。櫨を採るのと同じような人だった。高い木へ上がって採った。溝をつけて採った。技術がいる。

紀美野町桂瀬、東克彦（昭和七年生まれ）、二〇一三年一一月二九日聞き取り

事例19

櫨はようけあった。実はろうそくの原料になった。自分の家では売ったことはない。櫨はかぶれる。漆・山椒・櫨などはあったけど、売るほどはなかった。桂瀬でも櫨を売る家もあった。

紀美野町桂瀬（出身）、山路武治（昭和三年生まれ）、二〇一九年八月一六日聞き取り

## 4　真国地区の事例

事例20

櫨は採った。自分で縄をかけて登った。親は身が軽くて、縄を簡単にかけて登った。自分は身が重かったけど、登って採った。かぶれなかった。山東（和歌山市）よりも向こうの人、吉礼（きれ）（和歌山市）あたりの人が買いに来た。おもに、ろうそくやろうけど。接ぎ木するのに、パラピン蝋を使う。自然に採らんようになった。木はある。ミシロ（筵）に詰めて、踏みつけて、一袋二五貫にした。袋は蓋が両方についていた。買う人が持ってきた。

紀美野町井堰、中家喜久司（昭和四年生まれ）、二〇一三年九月二日聞き取り

事例21

おもに生活の基盤はシュウロと櫨だった。だいたいの家にシュウロと櫨があった。

志賀野は真国よりも櫨が多い。シュウロは志賀野よりも真国のほうが多

い。

シュウロは土地の肥えた場所。赤土は痩せている。黒土は肥えている。シュウロは肥えたところでないとできやん（できない）。櫨は肥をやった。柿を植えたのと同じ。実生から継いで育てた。下肥をやった。櫨は多い家だと一〇〇〇貫あった。冬に採る。紅葉した葉が落ちて実だけになると採る。一月すんだら採る。本数ある。今も山に残っている。櫨を採ったのはもう自分ぐらいしかいないのではないか。サーカスみたいに、ロープを持って行って上がって採った。

紀美野町蓑垣内、芝待雄（昭和一二年生まれ）、二〇一四年一月八日聞き取り

事例22

櫨はちっと（少し）あった。採りにきた。自分では採れへん（採らない）。しれてた（量は少なかった）。

紀美野町蓑津呂、前坊秀子（昭和五年生まれ）、二〇一三年一二月二五日聞き取り

櫨はろうそくにした。東さんとこで採っていた。ろうが売れやんようになって（売れなくなって）、倉庫に積んでいた。一旦売れやんようになったが、積んでいたのが売れて、もうけたという。

紀美野町蓑津呂、森谷昌子（大正一二年生まれ）・宮西美恵子（昭和四年生まれ）・前坊秀子、二〇一三年一二月二五日聞き取り

事例23

櫨はけっこう山にあった。採って出すだけ。野上か和歌山の人が買いに来た。自分も櫨採りをした。植えて作っていた。苗木から育てたことはない。（自分が知っているのは）すでに成木だった。生育することはなかった。洋蝋のほうがきれいといって、櫨で作った和蝋は売れなくなった。

紀美野町花野原、森下富夫（大正一五年生まれ）、二〇一三年八月三〇日聞き取り

事例24

櫨は学校を卒業してからも採りに行った。ようけあるとこがあった（たくさんあるところがあった）。ええ値した（いい値段で売れた）。買いに来ていた。どこの人か知らない。昔の人は植えたらしい。

紀美野町初生谷、坂明雄（昭和九年生まれ）、二〇一三年八月三〇日聞き取り

事例25

櫨も作った。実をろうそくにする。だいぶあった。大正のころか。自分が一・二年のころには櫨はあった。実を採るのに高いところに上がらなあかん（登らないと採れない）。専門の人があった。土地の者は植えてるだけ。真国（蓑垣内）の芝さんは、櫨の実を買いにきた。

紀美野町円明寺、田中惇元（昭和一〇年生まれ）、二〇一三年七月一九日聞き取り

事例26

櫨はうちも実を採って売った。父親が採って売っていた。大きな木があった。採りに上がっているのを見た。

紀美野町勝谷、前代清子（昭和四年生まれ）、二〇一三年九月一一日聞き取り

事例27

櫨も売った。自分の家はなかった。井堰にもあった。

紀美野町四郷、部屋浦ハマ子（昭和一七年生まれ）、二〇一三年九月一〇日聞き取り（竹村悠氏も同行）

## 5　国吉地区の事例

事例28

櫨はかぶれる。売れへん（売らない）。谷にはない。

紀美野町谷、浦宏子（昭和九年生まれ）、二〇一五年八月一〇日聞き取り

事例29

山櫨はいくらでもある。接ぎ木で大きならす（接ぎ木して大きく育てる）。園芸種。海南あたりはずっとあった。川の土手とか。こっちもたまにあった。ちょいちょいあるので、仲買人が買いに来た。且来に（櫨を扱うところが）二軒あった。もうやってないか。

仲買人は櫨・ぜんまい・フシなど、山で採れるものを買った。おばあさんの小遣い稼ぎ。

紀美野町谷、福岡正富（昭和一三年生まれ）、二〇一五年九月八日聞き取り

事例30

櫨はない。高野山から護摩を焚く木を取りに来た。櫨ではなかったか。

紀美野町谷、西谷道子（昭和一二年生まれ）、二〇一九年九月一〇日聞き取り

事例31

櫨はあったけど少なかった。

紀美野町谷、森本正永（昭和三年生まれ）・千代（昭和五年生まれ）、二〇一六年一月六日聞き取り

## 6　毛原・長谷地区の事例

事例32

櫨はちっとはあった（少しはあった）。うちにはなかった。家によってはあったか。

紀美野町毛原中、神崎博介（昭和一四年生まれ）、二〇一四年八月二二日聞き取り

事例33

櫨は少しあった。売る人もあった。一・二軒だった。（志賀野では櫨がかなり売ったということを聞いたと伝えると）志賀野はぬくい（暖かいから櫨が多い）。

紀美野町長谷宮、大和公明（昭和七年生まれ）、二〇一四年八月八日聞き取り

### 7　紀美野町東野上・小川地区

事例34

櫨の量はしれてる（量は少ない）。貴志川（紀の川市貴志川町）から採りに来た。海南ではなかった。売った。櫨はもうない。

紀美野町柴目、上田幹雄（昭和六年生まれ）、二〇一三年八月八日聞き取り

事例35

櫨は小川とか美里にあった。吉野はない。

紀美野町吉野、中家俊（昭和八年生まれ）、二〇一四年八月二二日聞き取り

事例36

（小川で作っていたものは何ですか、という問いに）棕櫚・柿・お茶・フシ・櫨・山椒。櫨は秋に紅葉するので分かる。フシはかぶれる。戦前には棕櫚が多かった。

自分の家には櫨は数えるほどしかなかった。やせたとこにいい。かぶれる。小川地区の中でも坂本・西福井・奥佐々はやせ地。櫨があった。目立つほどもなかった。一本あったらだいぶ（かなりの実が）採れる。防風林に櫨を植えていた。

紀美野町西福井、田尻章（昭和四年生まれ）、二〇一九年九月一一日聞き取り

## 四　考察

三章では紀美野町各地における櫨に関する聞き取り内容を列記した。話者の特徴としては、現在も櫨採りをおこなっている人、過去に櫨採りをしたことがある人、家族が櫨採りをしていた人という人、櫨の実を採ってもらって販売していた人、家には櫨がないが見聞きして櫨のことを知ってる人、に分かれる。これらの事例を総合すると、これまで実態が不明であった紀美野町における櫨栽培・採取の具体的な様子がうかがえる。

### 1　民俗知識

紀美野町には櫨に関する民俗知識が豊富にあったことが分かった。事例を総合すると、以下のような民俗知識がみられた。自生の櫨と葡萄櫨という種類を区別している。自生の櫨のことはヤマハゼ（山櫨）・ミショウ（実生）・ナミ（並）などと呼んでいる。これは実が小さい。それに対して、葡萄櫨というのは、実が葡萄のようになるために、そのように呼ばれているという。これは実が大きい。ただし、葡萄櫨は種から育てることはできず、接ぎ木をしないといけないという。

櫨は四月末から黄色い花が咲き、一一月から紅葉し、一二月ごろ実を収穫できる。実のなり方は年によってて違いがあり、オモテバン（表番）とウラバン（裏番）がある。櫨のみはヒヨ・ツグミなどの小鳥が食べにくる。櫨の実を食べくるところを狙って鳥を捕ることもあった。

このような櫨に関する民俗知識については、櫨採りをしてきた人から語られる場合が多かった。ただし、地域によって民俗知識には差異が認められる。志賀野地区および、下神野地区・上神野地区・真国地区においては、家族が櫨採りをしてきた人や、見聞きして知っている人でもある程度の民俗知識は有して

いる。これらは、櫨採りを積極的におこなってきた地域であるため、櫨に関する知識が蓄積されたと思われる。反対に、櫨採りを積極的にしていなかった地域では、櫨のことはあまり語られなかった。

## 2　栽培技術

栽培技術に関しては、志賀野地区を中心に、下神野地区・上神野地区・真国地区において聞き取ることができた。

紀美野町では櫨は一般的に山に自生している。しかし、櫨採りをおこなう人々は、積極的に櫨を植えてきたことが分かった。櫨を植える場合、種や苗を植え、接ぎ木をして葡萄櫨を育てた。葡萄櫨は自生の櫨よりも実が大きく、高く売れるからであった。多い家では一〇〇〇本ほど櫨を植えている場合もあった。

植える場所は、山・畑の畔・山道、などであった。山に植える場合は、自分の家の山の一部に植えていることが多い。そのうえ、家から行き来しやすい山に植えていたようである。ただし、志賀野地区では雨山に多くの家が櫨を植えていた。畑の畔に植える場合は、防風林をかねていたという。山道に植える場合は、砂留に植えたという。なお、棕櫚（しゅろ）の場合も、畑の周囲や山道にも櫨と同じように植えていた。

櫨の手入れとしては、下草を刈り、肥料を与える程度であった。典型的な半栽培植物といえる。肥料は人糞を与えたという。畑の周囲の櫨は、畑の肥料のためによくできた。櫨は消毒はいらないという。

## 3　採取方法

採取方法についても、志賀野地区を中心に、下神野地区・上神野地区・真国地区において聞き取ることができた。

櫨の実の採取時期は一二月から一月である。平均五mほどある櫨の木に登って採取する。技術が必要なため、だれでもできるものではなかった。したがって、家族が採れない場合は、専門の人に採ってもらうということになる。事例1の七良浴（しちりょうぞこ）正氏の妻は、正氏は櫨採りが好きだと語る。

櫨は触れるとかぶれるが、手袋をしないで採っていた。採り始めたときはかゆくなっても、しばらくすると慣れてくるという。実は枝の先についているため、枝を引き寄せて採る。枝を引き寄せる道具は鉤という。太い枝はロープで引き寄せてから実を採る。事例1の七良浴氏の場合、採取した実を入れる籠を木の上に載せておく。この籠は二貫程度（約七・五kg）入る。籠を木から下ろし、実をドンゴロスという袋に入れる。山からはオウコ（天秤棒）で袋を前後に担いで持ち帰る。人によって異なるが、一五貫前後（約五六kg前後）担いで持ち帰ったという。午前に一回、午後に一回運び、一日に三〇貫程度（約一一二kg）山から下ろした人もいた。

家に持ち帰った櫨の実はしばらく小屋で保管する。乾燥して水分を取ってから売る。海南市や紀の川市貴志川町などの製蝋屋に販売してきた。事例1の七良浴氏の場合、現在は櫨が三〇〇本あり、一年に三〇〇貫程度（一一二五kg）収穫しているという。昭和初期までは、多い家で櫨が一〇〇〇本あり、一年に一〇〇〇貫程度収穫していたという。こうした数字を総合すると、おおよそ一本の櫨から一年に一貫（三・七五kg）程度の実を収穫できるということになる。

## 4　家ごとの差異

紀美野町における櫨に関する事例を総合すると、昭和初期での紀美野町にお

ける人々と櫨とのかかわりは以下のように分類できる。

① 積極的に櫨を栽培、人を雇って櫨採りをする。

② 積極的に櫨を栽培、自家で櫨採りをする。

③ 積極的に櫨を栽培、自家のみならず他家にも櫨採りに行く。

④ 櫨は山にあるが積極的に栽培していない、他家の人に櫨採りをしてもらい販売する。

⑤ 家に櫨はなく、家族も櫨採りをしない、見聞きして知っている。

①、②、③の違いは、家ごとの櫨山の面積や本数、および櫨採りが好きかどうか、などの違いが関係している。紀美野町では、山に櫨を植える場合、棕櫚と同じような場所に植えていることが多かった。紀美野町では一般的に、家の周囲の平地や谷川沿いの水を確保しやすい場所には水田を作り、家の背後の山の斜面に換金作物を植える場合が多かった。紀美野町では平地が少ないため、水田面積は全体的に限られている。そのため、家の後背地に換金作物を植えて収入源とする場合が多かったのである。家の背後の山の斜面、いわゆる里山的な部分に植えられたのは、紀美野町では櫨のほか、棕櫚・みかん・柿などである。これらの植物の組み合わせ、および櫨の割合は家ごとに異なっていた。事例1の七良浴氏の場合、櫨を集中的に植える山があり、櫨畑にしていたという。七良浴氏の場合は、水田を耕作しながら、合間に棕櫚の皮むき、農閑期の冬に櫨の実採取をおこなってきた。七良浴氏の場合はとくに棕櫚と櫨が大きな収入源となっていたという。ただし、七良浴氏の家でも、昭和初期には一〇〇〇本の櫨があったが、平成五年（一九九三）ごろには五〇〇本（栽培面積七〇a、総収穫量約一二〇〇kg）[6]、現在では三〇〇本で収穫量は一一二五kgと、次第に栽培面積と本数を減少してきている。七良浴氏の場合は、櫨と棕櫚を柿・みかんに切り替えたという。同じ家でも、時代によって、より高値で取引される栽培作物に転換している。

一方、棕櫚を中心に植えた山のことを紀美野町では棕櫚山と呼んでいる。櫨山、櫨畑という表現は一般的ではなく、櫨山はなかった、と語る人もいる。それに対して、棕櫚山という表現は多くの話者から語られる。紀美野町では全域的に棕櫚は大きな収入源であり、棕櫚を集中的に植えた棕櫚山を持っている家は多かったようである。事例7・9・16では、棕櫚山に櫨を植えていた、と語られる。こうした家でも、水田を耕作しながら、棕櫚や櫨を採取していた。棕櫚山があった家では、棕櫚の収入が最も大きかったと思われる。これらの家でも、棕櫚山は柿やみかん、その後は山椒に転換する場合が多かった。

④の家では、積極的に櫨を植えた記憶がなく、山や屋敷に自生している櫨の実を採りに来る人がいて、その人に販売した、という程度である。聞き取りで確認できるよりも前の時代、つまり明治時代以前に櫨を植えたり、接ぎ木をした可能性はあるが、現在の住人には記憶が継承されていない。また、櫨の本数も限られている。こうした場合の櫨は、漆・ぜんまい・フシなどと同じような感覚で語られることが多い。小遣い稼ぎであった、と語られる場合もある。山に生えていて、収入にはなるが、積極的に採取するものではない、という存在であった。

## 5 地域的特徴

4節では、家ごとに櫨の割合が異なっていたことを説明したが、地域によっても差異が認められる。三章の事例を総合すると、現在まで櫨採りをおこなう人がいて、地域全体で櫨に関する民俗知識が蓄積されているのは志賀野地区であるといえる。このほか、下神野地区・上神野地区・真国地区でも栽培・採取が盛んであったことがうかがえる。

これらは、『野上町誌』によると、明治時代から昭和初期にかけて櫨の生産量が多かった地域である〔野上町誌編さん委員会　一九八五〕。『野上町誌』掲載の大正一二年（一九二三）ごろの統計によると、志賀野村が一万三五〇貫、真国村が五六〇〇貫、東野上村が五〇〇〇貫、下神野村が二五五〇貫、上神野村が二一八五貫、小川村が一七〇〇貫、南野上村が一〇〇〇貫、中野上村が二〇〇貫、細野村が二〇八石七五貫、猿川村が一四〇斤となっており、長谷毛原村は数字が記されていない。これまでの聞き取り調査では、東野上地区・小川地区ではあまり確認できていないが、[7]そのほかの地域的な差異は聞き取り調査結果と大正時代の記録でほぼ合致している。大正から昭和初期にかけて、志賀野村における櫨生産が抜きんでていたことがうかがえる。明治七年（一八七四）の統計では、志賀野村内の集落ごとの生産高が記されている。国木原が八五〇貫、釜滝が三八〇貫、東野が二〇〇貫、西野が二〇〇貫、松瀬が一〇〇貫で、志賀野村全体で一七三〇貫となっている。

聞き取り調査からも、志賀野地区では地域全体で現在でも櫨に親しみをもっていることがうかがえた。事例4で語られていた志賀野小学校の校歌の一番には次のような歌詞がみられる。

さみどりの　しゅろの　はかげよ　はぜのきよ
さやかぜゆれる　このまどに
えがおかわして　ああいつも
へいわのこばとを　むねにだく
かがやくがくえん　しがのしょう

志賀野小学校の校歌には棕櫚と櫨が、地域の代表的な植物（生業）として描かれている。棕櫚については紀美野町内の複数の小学校の校歌でもみられるが、櫨については志賀野小学校の校歌のみであった。志賀野地区では、家によってかかわりの程度は異なっていたが、昭和二〇年代までは櫨と棕櫚は大きな収入源になっており、恩恵を受けてきたなじみのある植物であったといえる。

このように、紀美野町においても、西部から中部にかけての地域で櫨栽培が盛んであったことが分かってきた。紀美野町東部では、櫨は自生しているが、本数も限られていて、積極的に採取して販売するものではなかった。

本稿は紀美野町を中心に取り上げているが、隣接する地域の民俗調査でも、筆者から櫨のことを確認したり、あるいは話者から語られることがある。ここで、紀美野町周辺地域における櫨の特徴を、筆者の調査および、関連の報告から簡単に触れておきたい。

紀美野町の北側にあたる紀の川市垣内や野田原で櫨のことを確認したが、この地域には櫨はないという。紀の川市上鞆淵では櫨の棒をオコナイという行事で用いている〔藤井　二〇〇一a・二〇〇一b〕。筆者の聞き取りでは、かつらぎ町・高野町でも櫨の棒を正月行事に用いていたところがあったことを確認した。高野山の寺院でも櫨を用いる行事がある〔亀岡　二〇〇九、高野町史編纂委員会編　二〇一二〕。

一方、紀の川市貴志川町には製蝋業の家があった〔貴志川町史編集委員会　一九八六〕。筆者の調査で確認したところでは貴志川町井ノ口などで櫨栽培がおこなわれていた。紀の川市貴志川町の製蝋業、櫨栽培は昭和初期から衰退したようである。事例5から分かるように、和歌山市山東方面にも製蝋業者がいたという。海南市且来には現在でも吉田製蝋所がある。事例3によると、かつては海南市亀川にも製蝋業の家があったという。海南市市坪には櫨の仲買人がいて櫨の実を買い集めていた〔海南市文化遺産活用実行委員会　二〇一五〕。海南市の製蝋業は、吉田製蝋所を残して昭和中期から衰退した。

有田市には明治時代に、柑橘園や除虫菊（蚊取り線香原料）栽培を開始していた上山英一郎（大日除虫菊株式会社：金鳥の創始者）が、櫨産業についても拡大しようと計画していた。有田市・有田川町には櫨が栽培されていたが、昭和初期から衰退した〔箕島町誌編纂委員会編　一九五一、有田市誌編集委員会編　一九七四〕。筆者の調査では、有田川上流域の有田川町で、櫨の棒を年中行事で用いることがあったことを確認している。

これらの事例を総合すると以下のような地域的分布が考えられる。有田市・海南市・紀の川市貴志川町など、平野部において製蝋業が存在した。紀美野町西部・中部など、製蝋業の周辺地域で櫨生産が盛んであった。製蝋業から遠く離れた東部の山間地では、自生の櫨を儀礼に用いることはあったが、生業として櫨の実を採取したり、販売することはなかった。このように、和歌山県北部における櫨栽培を概観すると、紀美野町における櫨栽培は、平野部に発達した製蝋業と密接に結び付いていたことが分かる。

## 6　歴史

最後に歴史的な変遷について述べておきたい。紀州ではもともと山間部を中心に櫨が自生していた。これはヤマハゼという品種であったと思われる。江戸時代中期、有田郡の田中善吉が薩摩から櫨を持ち込んだ。これはハゼノキ（別名リュウキュウハゼ）という品種であったと思われる。

新たに紀州に伝来した櫨は、藩の殖産政策の一環として積極的に紀州北中部の沿岸部に植樹された。延享二年（一七四五）から宝暦二年（一七五二）の七年間で海士・有田・日高郡の一七七か村で約二七万本を植樹している。その後も櫨の植樹は進められ、明和五年（一七六八）には海士・名草・那賀郡の各地へ櫨実を配布している。このとき、那賀郡野上組（現在の紀美野町西部・海南市東部）の大庄屋にも櫨実が配られている〔笠原　一九七三〕。ただし、当時の野上組は、現在の紀美野町域でいえば東野上地区に当たる。現在の紀美野町志賀野地区・小川地区・下神野地区・上神野地区・真国地区などは高野山領であったため、直接、野上組の大庄屋から櫨実が配布されることはなかったと思われる。志賀野地区などに櫨がいつ植樹されたのかについては明確には分かっていないが、隣接する高野山領の地域にも、徐々に広まっていったと推測される。

江戸中期以降、櫨の栽培が拡大するとともに、櫨の実からろうそく原料を抽出する製蝋業が誕生した。製蝋業者は海士・有田・日高郡（現在の和歌山県北中部の沿岸部）に立地していた。櫨が植樹されたのは、製蝋業者が存在した周辺地域ということになる。現在の紀美野町西部はちょうど製蝋業者が存在する周辺の地域に当たっていた。

製蝋業および櫨生産が盛んになったが、江戸時代の製蝋業には盛衰もあった。製蝋業がやや衰退したとき、実の大きな葡萄櫨が発見された。この原木が発見されたのが現在の紀美野町志賀野地区であった。自生していたヤマハゼと植樹したハゼノキが人為的、および自然交配により、より実が大きな葡萄櫨が誕生した可能性がある。江戸時代には、葡萄櫨と同様、全国各地で実が大きな櫨が相次いで発見されている〔矢野　二〇一五〕。現在の紀美野町下神野地区や志賀野地区の人々は、櫨の収入を増やすため、葡萄櫨を積極的に拡大していった。(8)

明治時代、大正時代も和歌山県北中部の沿岸部では製蝋業が存在し、紀美野町付近での櫨生産はさらに拡大したようである。先述した『野上町誌』掲載の明治七年と大正一二年ごろの櫨生産高を比較すると〔野上町誌編さん委員会　一九八五〕、志賀野村においては明治から大正にかけて大幅な櫨の植樹をおこ

なっていることがうかがえる。これまでの製蝋業の歴史研究や、現在進行中の葡萄櫨原木調査などを総合すると、以上のような大きな変遷が考えられる。

そのうえで、民俗調査から明らかになったことをまとめると次のようになる。昭和初期になると、沿岸部に存在した製蝋業は縮小し、周辺地域での櫨栽培も衰退していった。しかし、海南市には昭和初期から中期まで、製蝋業は複数存在していた。このため、後背地に当たる、紀美野町西部を中心に櫨栽培は継続していた。昭和三〇年ごろまでは志賀野地区および、下神野地区・上神野地区・真国地区では櫨採りは盛んで、棕櫚とともに大きな収入源となっていた。しかしながら、昭和三〇年代になると、洋ろうそくが普及し始め、和ろうそくの原料としての櫨は売れなくなり、櫨採りをする人も減少していった。現在、和歌山県では製蝋業として営業しているのは海南市且来の吉田製蝋所のみとなっている。昭和中期以降、櫨採取者が減少すると、櫨は高値で取引されることもあった。わずかに残る製蝋業への原料供給先として、櫨採りという仕事が好きであった志賀野地区の七良浴氏は、現在でも櫨の実を採り続けている。

（注）

（1）りら創造芸術高等学校の鞍雄介氏と生徒の調査によって見出された昭和初期の文献のなかには、和歌山県における櫨の栽培について記した文章はみられる〔中里　一九三一〕。

（2）平成二三～二五年度科学研究費補助金基盤研究（C）「紀の川流域における中世荘園の地域環境史的研究」（研究代表者・高木徳郎）の一環として筆者がおこなった民俗調査である。

（3）これまでの民俗学実習では、二〇一四年度卒業生の竹村悠氏が紀美野町の植物に関する聞き取り調査を積極的におこない、櫨に関する聞き取りもおこなっている。本稿では筆者が同行していない事例のみ一部引用した（事例8）。

（4）このときは、事例2の赤阪智勇氏のほか、あと女性二人も参加してくれており、志賀野地区の年中行事や生業に関して聞き取りをおこなった。ただし、櫨に関する内容に関しては、西山氏・下野尻氏・井本氏を中心に語られた。

（5）この時点では、葡萄櫨の原木はまだ再発見されていなかった。葡萄櫨の原木の候補として、前村勲氏が案内してくれたのが柳沢氏宅の櫨の木であった。

（6）七良浴正氏は六三歳のときに新聞取材をされ、新聞記事に掲載された。そのときの情報である。新聞記事については七良浴氏の家で拝見したが、この記事の年月日は確認できていない。

（7）筆者のこれまでの調査において、東野上地区では柴目のほか、小畑・動木・下佐々において生業を含めた聞き取りをおこなっている。小川地区では吉野のほか、福井・奥佐々・坂本・中田・梅本の各集落で生業を含めた聞き取りをおこなっている。いずれの地区でも、筆者から積極的に櫨に関する質問をしなかったという点を考慮しなければならないが、話者からあまり櫨のことは語られなかった。事例36については、筆者から櫨について質問したため、語られたものである。

（8）葡萄櫨の原木を発見し、この櫨を接ぎ木などによって江戸時代から明治時代にかけて県内外へ広めていった様子は、明治二六年（一八九三）の『和歌山県農事調査書』〔和歌山県内務部　一八九三〕、昭和八年（一九三三）の『木の国山林時報』〔日下部　一九三三〕、昭和九年（一九三四）の『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』〔和歌山県　一九三

四）などに記載されている。これらの文献は、りら創造芸術高等学校の鞍雄介氏と生徒の調査によって見出されたものである。

（参考文献）


有田市誌編集委員会編　一九七四　『有田市誌』　有田市

安藤精一・五来重監修　一九八三　『日本歴史地名大系　三一　和歌山県の地名』　平凡社

海南市文化遺産活用実行委員会編　二〇一五　『大窪の笠踊り調査報告書』　海南市文化遺産活用実行委員会

海南市立歴史民俗資料館編　一九九一　『展示解説集　10　あかりとくらしあかりの歴史・海南の灯芯・木ろう・京都の和ろうそくづくり』　海南市立歴史民俗資料館

笠原正夫　一九七三　「紀州藩の殖産政策と蝋燭仲間」安藤精一編『近世和歌山の構造』名著出版（のち笠原　二〇〇二『紀州藩の政治と社会』清文堂出版）

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八五　『角川日本地名大辞典　和歌山県』　角川書店

神山なずな・宮本遥香・森川莉瑚・小堀良太・合志綾乃　二〇一九　「天然記念物の再指定を目指して～ブドウハゼの原木調査～」『平成二九年度指定スーパーサイエンスハイスクール第2年次　課題研究論文集』和歌山県立向陽高等学校

貴志川町史編集委員会編　一九八六　『古老にきく貴志の里　貴志川町史　別冊史料』　貴志川町

日下部生　一九三三　「葡萄の櫨起源」『木の国山林時報』九三

鞍雄介　二〇一八　「元天然記念物葡萄櫨の原木発見記」『マナビィスト支援セミナー及び企画ゼミ（紀北の部）和歌山の文化資源再発見～歴史・文化・風俗～』和歌山県立図書館

高野町史編纂委員会編　二〇一二　『高野町史　民俗編』　高野町

清水町誌編さん委員会編　一九九八　『清水町誌　下』　清水町

下津町史編集委員会編　一九七六　『下津町史　通史編』　下津町

砂川佳子　二〇一六　「其不仕合余り之事にいとおかしく　―岩崎平四郎の櫨商売―」『和歌山県立文書だより』四六

竹村悠　二〇一四　「植物と人間のかかわり　～和歌山県海草郡紀美野町を中心に～」（二〇一四年度近畿大学文芸学部文化学科卒業論文）

中里技手　一九三一　「葡萄櫨の栽培」『木の国山林時報』七七

野上町誌編さん委員会編　一九八五　『野上町誌　下』　野上町

藤井弘章　二〇〇一a　「久保のドンドコドン（オコナイ）」和歌山県立博物館編『歴史のなかの〝ともぶち〟―鞆淵八幡と鞆淵荘―』和歌山県立博物館

藤井弘章　二〇〇一b　「鞆淵の年中行事」『和歌山県立博物館研究紀要』七

藤井弘章　二〇一四　「民俗調査からみた神野・真国荘地域の生業」高木徳郎編『紀伊国神野・真国荘地域総合調査』（平成二三年～二五年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書　研究課題「紀の川流域における中世荘園の地域環境史的研究」研究代表者・高木徳郎）

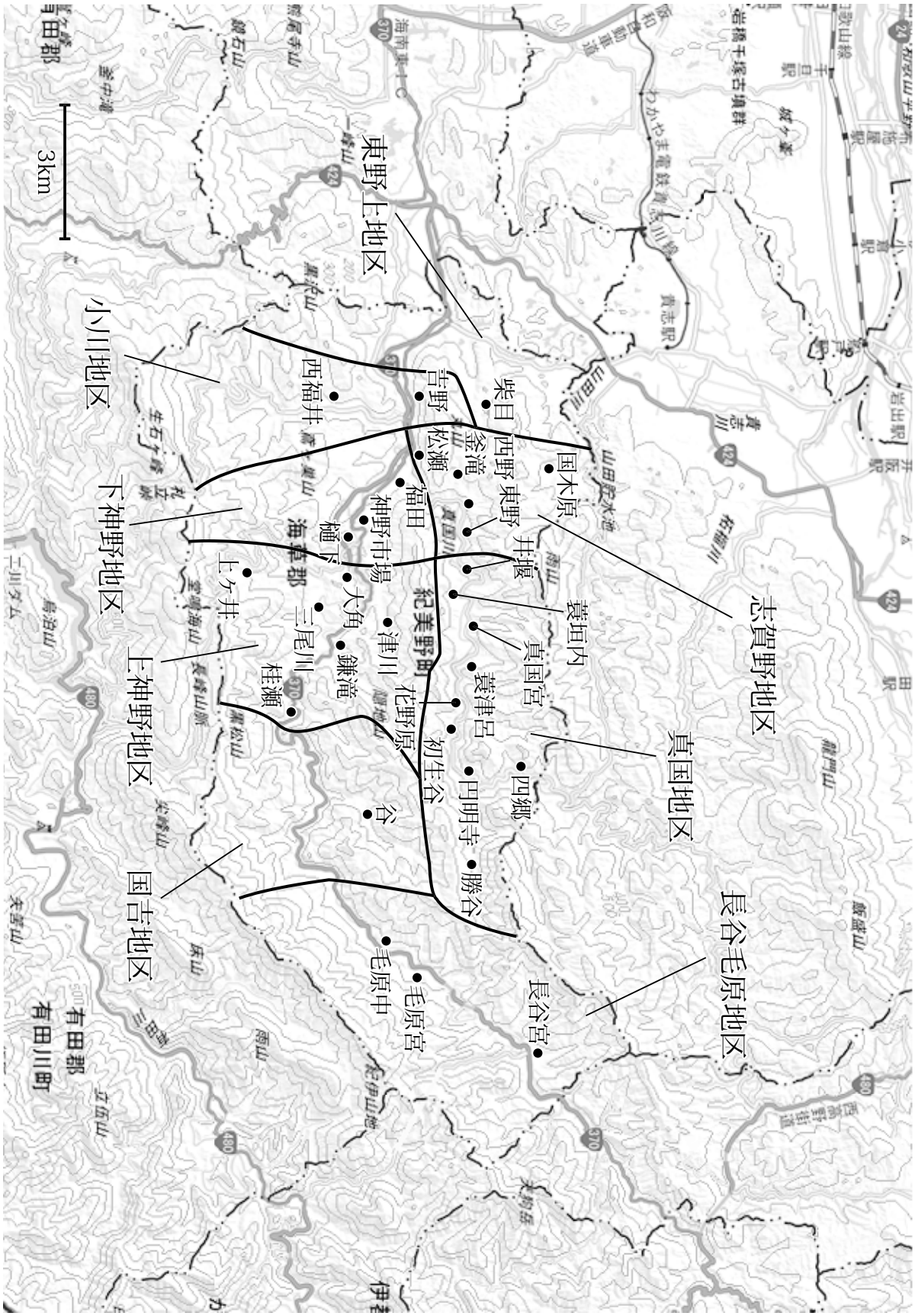
藤井弘章　二〇一五　「大窪の民俗」海南市文化遺産活用実行委員会編『大窪の笠踊り調査報告書』海南市文化遺産活用実行委員会

三木明音・横田沙羽子・中村巴菜・鞍雄介・藤井弘章　二〇一九　「抹消天然記念物「葡萄櫨の原木」調査報告」『民俗文化』三一

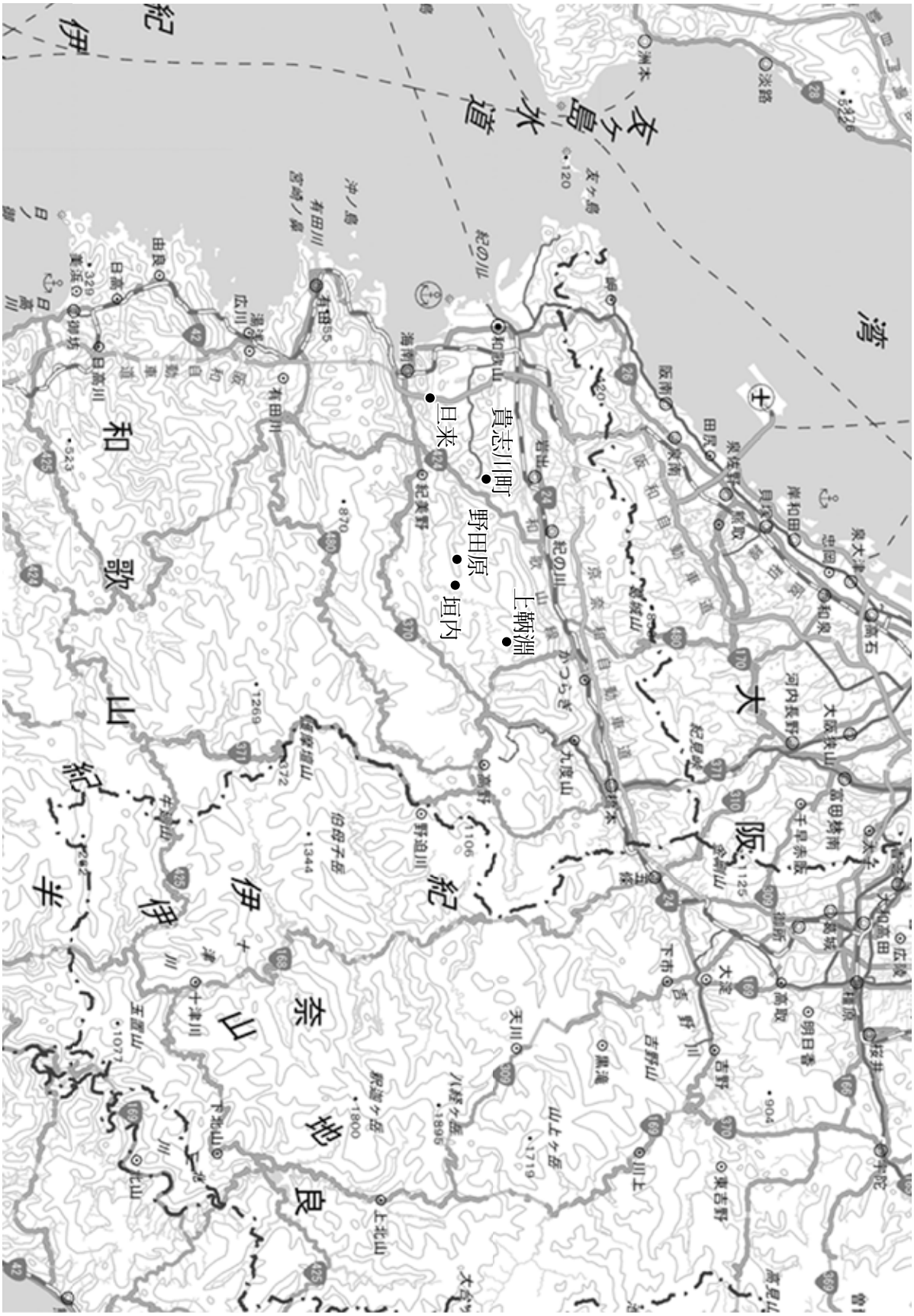
箕島町誌編纂委員会編　一九五一　『箕島町誌　たちばなのさと』　箕島町誌発

行会
矢野眞由美　二〇一五　『櫨の道』　松山櫨復活委員会
和歌山県編　一九三四　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』一三　和歌山県（同編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書　五　和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書第一三―一五輯』歴史図書社　収録）
和歌山県内務部編　一八九三　『和歌山県農事調査書』下　和歌山県内務部（同編　一九六三　『明治文献研究シリーズ　二　和歌山縣農事調査書　下』明治文献研究会　収録）
和歌山県立博物館編　二〇一一　『中世の村をあるく　―紀美野町の歴史と文化―』　和歌山県立博物館

（付記）
事例として紹介させていただいた方々以外にも、紀美野町では多くの方にお世話になっている。とくに志賀野地区の方々には、民俗学実習において多くの学生たちとともに、大変お世話になっている。紀美野町の教育長である東中啓吉氏をはじめ、町の教育委員会には、話者の紹介や情報提供などでご協力いただいている。この場を借りて感謝の意を表したい。
りら創造芸術高等学校の鞍雄介氏の熱意と行動力にはいつも感服している。本稿は、鞍氏とりらの生徒たちに刺激を受けて、これまでの櫨に関する調査データをまとめることにしたものである。また、佐野豊氏をはじめとして和歌山県海草振興局農林水産振興部林務課の方々には葡萄櫨の原木に案内いただくなど、民俗学実習の際には学生たちとともにお世話になっている。すべての方にあらためて感謝したい。
なお、写真については、注記していないもの以外、筆者が撮影したものである。




地図1　紀美野町（国土地理院の電子地形図に加筆）




地図2　周辺地図（国土地理院の電子地形図に加筆）

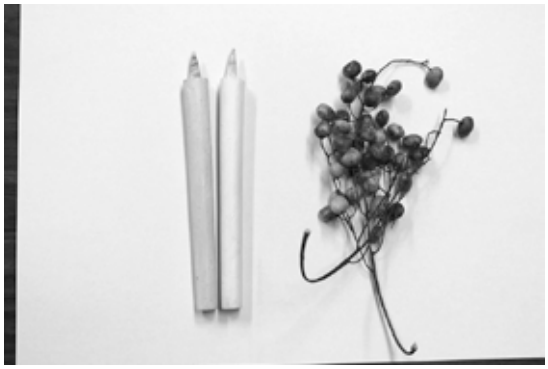


写真1　葡萄櫨の実と和蝋燭（2017年12月27日、りら創造芸術高等学校にて撮影）

写真2　葡萄櫨の原木（2017年12月27日撮影）

写真3　七良浴正氏宅（事例１）での聞き取り（2014年9月11日撮影）

写真4　七良浴氏宅裏の櫨の木（2017年12月27日撮影）

写真5　七良浴氏宅の畑の横にある櫨の木（2014年9月11日撮影）

写真6　櫨の実（2014年9月11日撮影）

写真7　櫨を採る道具（2014年9月11日撮影）

写真8　櫨を採る道具（2014年9月11日撮影）

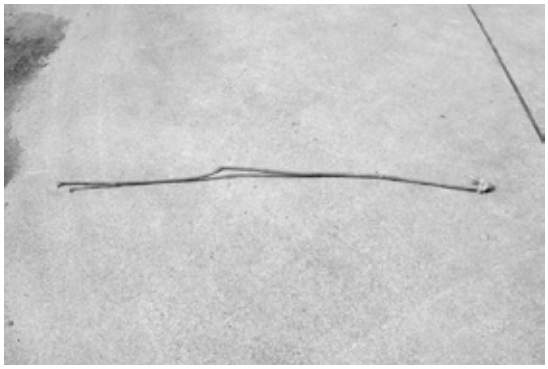


写真9　櫨を採る道具（2014年9月11日撮影）

写真10　収穫した櫨の実を入れる袋（2014年9月11日撮影）

写真11　収穫した櫨の実を保管しているところ（2017年12月27日撮影）

写真12　七良浴氏の櫨採り（七良浴氏の家の裏）（2015年1月18日、りら創造芸術高等学校撮影）

写真13　写真12に同じ

写真14　写真12に同じ

写真15　写真12に同じ

写真16　写真12に同じ

写真17　写真12に同じ

写真18　写真12に同じ

写真19　七良浴氏の櫨採り（山の上）（2017年11月28日、りら創造芸術高等学校撮影）

写真20　写真19に同じ

写真21　大浦氏宅（事例５）の櫨（2013年8月14日撮影）

写真22　写真21に同じ

写真23　柳沢氏（事例７）の家（2017年1月6日撮影）

写真24　柳沢氏の櫨の木（2017年1月6日撮影）

写真25　写真24の実（2017年1月6日撮影）

写真26　写真24の実を食べに来たメジロ（2017年1月6日撮影）

写真27　葡萄櫨の実（2018年11月5日、りら創造芸術高等学校撮影）

写真28　志賀野地区の櫨の看板（2019年1月8日撮影）

写真29　志賀野小学校の校章（「志」の両側に描かれているのが櫨の葉）（紀美野町教育委員会提供）

写真30　オコナイで使用する櫨の棒（紀の川市鞆淵、2000年1月8日撮影）